

# 天竺寺法誦の教学とその背景

——『梵網經疏』断簡を中心に——

中西俊英

## 1. はじめに

天竺寺法誦(718-778)は、伝統的には、中国華嚴宗第三祖法蔵(643-712)の弟子である静法寺慧苑(673?-743?)<sup>1)</sup>の門人で、第四祖澄観(738-839)に華嚴教学を授けた人物とされる<sup>2)</sup>。これは、法誦や澄観の伝記資料にもとづいたものであるが、現存唯一ともいえる法誦の著作である『梵網經疏』からは、慧苑の影響や澄観の華嚴教学との類似性はあまり確認されない。本論文においては、『梵網經疏』の断簡<sup>3)</sup>を手がかりに、法誦の教学を確認し、その独自性を指摘するとともに、教学の濫觴についても考察してみたい。

## 2. 同時・異時の五教

法誦の教学に関して、端的にうかがえるのは、『梵網經疏』「第三機教分齊」において述べられる教相判釈である。法誦の教判は、夙に指摘されるように<sup>4)</sup>、法宝の五教判に影響されたものであるが、その特徴は、『維摩經』の一音說法にもとづいて以下のように述べ、五教を同時と異時に分ける点にある。

四簡時者、如《維摩經》：“佛以一音演說法，衆生隨順各得解”。此有二義。一、如來一音同一切音，名爲圓音。故《花嚴》云：“一切衆生語言法，一言演說盡無餘”。二、如來一音說一切法，又名圓音。故《花嚴》云：“杓一語言中，演說無邊契經海”。今所立義有其二門：一約乘分立二，二約義爲五。初義者，脫云“一音隨順各解”，以衆生根有五差別，使同時，則有五教：一小乘教，二大乘教，三三乘教，四一乘教，五一性教。(惠谷隆戒 [1937: p.202])

同時の五教は乗の点からの分類であり、衆生の機根に応じてのもので、「小乗教」「大乘教」「三乘教」「一乘教」「一性教」である。このうちの「一乘教」に『華嚴經』が、「一性教」に『梵網經』が配当されているが、『華嚴經』と『梵網經』およびその他の經典との関係に関して、法誦の直接的な記述は確認されない。また、

同時の五教と同様の対機という観点から、「我法具有宗」「有法無我宗」「安立法相宗」「実相中道宗」「蔵性縁起宗」の五宗も立てている<sup>5)</sup>が、これは法蔵が『起信論義記』や『大乘法界無差別論疏』『入楞伽心玄義』などで用いた四宗判を淵源とするものであることは、その内容などから、ほぼ間違いないであろう。

亦分五別，則異時分五。初聞小乘，信解修行，根機漸熟。次説大乘，唯爲菩薩於己非分，然心生慕仰，如舍利弗見諸菩薩，受記作佛。而我等不願斯事，甚自減傷共於如来無量見，根機分熟。次説三乘《深蜜經》等。不定性人許廻心也。此三依《解深蜜經》判。（中略）是以第四説《法花經》一切聲聞皆得化佛。（中略）惣會三乘歸一乘故。然《深蜜經》明一乘權者，説於昔説理性一乘，以三乘人同寂靜性無二故。蜜説爲一，故判爲權。非會《法花經》明行一乘也。又説《法花》在《深蜜》儀，不可前經會於後教。（中略）明知，後説必會前經。《法花》但云，一會隨喜皆得受記，未明闡提亦得成佛。是故第五説《涅槃經》，乃至闡提悉許成佛。惣會五性歸一性故。（中略）此乃從始經終是名豎五教也。（惠谷隆戒 [1937 : pp.207-209]）

異時の五教は、仏の一音があらゆる教説の多様性を備えているという『華嚴経』の教証にもとづいた解釈で、三乗教に『解深密経』，一乗教に『法華経』，一性教に『涅槃経』を配当する。そして、この異時の五教を“豎の五教”とし、一切成仏という点から『涅槃経』を最上位に位置づけている。

この法説の同時・異時という二重の五教の網格は、いわば能化である仏の側からみると同時の五教となり、所化である衆生の側からみると異時の五教となるものである。法説に華嚴教学を授けたとされる慧苑は、劉虬の五時教判や玄奘の三時教判を真っ向から否定し、教の内容にのみもとづいた四教判を立てるが、この点においては、法説と慧苑との間には逕庭があると想像される。

### 3. 法説の種姓解釈

法説は法宝の影響を受けているが、独自に衆生の資質に応じた同時の五教を立てている。そして、この衆生の資質に関しては、法説はまず「今解本有性者，即如来蔵」と述べ、如来蔵が本有であるとし、続けて以下のように述べる。

言五性者，約習種説。若人未習三乘善根，名爲無性。修於三乘，各至不退，名三乘定性。未至不退，名不定性。非本有也。（惠谷隆戒 [1937 : p.203]）

すなわち、法説は『成唯識論』に代表される五性格別説を認めつつも、習種姓から説いたもので、本有の固定的なものではないとする。三乗の行を習っていないものは無性、三乗の行を習ったものは三乗定性、三乗を習うも不退の位に至っていなければ不定性とし、因である如来蔵と縁である諸波羅蜜等とが和合して仏

と成るとする。そして、一闍提と寂滅の二乗に関しても次のように述べる。

問、若其不立無漏種者、誰生聖道？答、由本藏性内薰之力、令生善根。故《涅槃》云：“闍提之人未來佛力性因緣故還三善根。”又由淨等流正法外緣熏力、修習諸善、與本和合、能生聖道。（中略）《楞伽》云：“彼捨一切善根闍提、若值諸佛善知識等、發菩提心、生諸善根。”此即無性、亦得成佛。《法華》云：“我滅度後、復有弟子不聞此經不知不覺菩薩所行。自於所得功德生滅度想、當入涅槃。我於餘國作佛。更有異名。是雖生滅度之想、入於涅槃、而於彼土、求佛知惠、得聞是經。唯以佛乘而得滅度、更無餘乘。除諸如來方便說法。”此即入寂聲聞亦得成佛。（惠谷隆戒 [1937：pp.203-204]）

すなわち、一闍提に関しては『涅槃經』や『楞伽經』を教証とし、聞熏習等を意図するであろう外縁の熏力や善知識に導かれることによって、寂滅の二乗に関しては『法華經』を教証とし、成仏を得るとしている。

このうち、種姓の解釈は、法蔵に依拠している<sup>6)</sup>。法蔵は、『華嚴五教章』「所詮差別」において大乘始教の種姓差別を説明する箇所以下のように解釈する。

其有種性者、[如]《瑜伽論》云：“種性略有二種：一本性住、二習所成。本性住者、謂諸菩薩六處殊勝有如是相。從無始世、展轉傳來、法爾所得。習所成者、謂先申習善根所得。”此中本性即內六處中意處爲殊勝。即攝賴耶識中本覺解性爲性種性。故梁《攝論》云：“聞熏習與阿賴耶識中解性和合。一切聖人以此爲因。”然《瑜伽》既云、具種性者方能發心。即知、具性習二法、成一種性。是故此二緣起不二。（鎌田茂雄 [1979：pp.335-336]）

法蔵は、本来的に五性の差別があるのではなく、修行の如何において暫時に仮立されたにすぎず、種姓には本性住と習所成のふたつがあるが、本有の種子が独存するわけではなく、習所成に増長されることで種姓が成立するとする。そして、修行の結果到達した各々の位について五性の別が仮立される。すなわち、固定的な三乗の本性住種姓は存在せず、菩薩の行を習い菩薩の習所成種姓を成ずる者は菩薩の本性住種姓を得、三乗の行を習い三乗の習所成種姓を成ずる者は三乗の本性住種姓を得、習所成種姓を成ずる途中ならば不定性を得、まったく修行しないならば無性とするのである。この法蔵の説は仏性論争に解決を与えたものとして評価されているが、法説はそれを踏襲したと考えられる。

#### 4. まとめ

以上、『梵網經疏』を中心に法説の思想を確認し、その濫觴についても考察してきた。彼の五教判は、その名称や説時に応じて区分することから、法宝の影響があるのは従来の指摘のとおりであるが、新たに衆生の資質という観点を加えた独自のものであり、一切成仏という観点から、特に『涅槃經』を重視していた。

(48)

## 天竺寺法説の教学とその背景（中 西）

そして、その立場から種姓を解釈し、本有の固定的な五性というものは存在せず、それらはいくまでも習種性であり、修行の結果によって性が定まるとしていた。この解釈は法蔵の『華嚴五教章』の説とほぼ同意であったが、『梵網経疏』に三聚浄戒を中心とした具体的な実践体系が説かれている<sup>7)</sup>ことも加味すると、法説は行を重視する人物でもあったのであろう。

法説の著作は現存するものが少なく、その思想の解明は容易ではない。法蔵と澄観とを結びつけた従来の華嚴思想史観からみれば、法説は、慧苑と澄観との間の橋渡しの存在として位置づけられてきた。しかし、華嚴教学内部だけの比較だけでなく、法宝などの様々な仏教学者の思想も踏まえることで、法説を新しく評価しなおすことも可能であろうし、今後の研究のひとつの視点としたい。

- 
- 1) 静法寺慧苑の生没年に関しては、坂本幸男 [1956 : pp.5-14] 参照。 2) 坂本幸男 [1956 : pp.51-57], 鎌田茂雄 [1965 : pp.181-187], 木村清孝 [1992 : pp.214-215] など。 3) 『梵網経疏』の現存箇所は巻上のみである。恵谷隆戒 [1937] 所収の上巻之上と、続蔵 60 巻所収の上巻之下とがあるが、両者の間には少しの欠落がある。前者は、東大寺の宗性 (1203-1292) の書写本を原本のままに転写したものであるが、書写段階での誤写が非常に多い。本論文での引用は、標点に関しては適宜付したが、文字に関してはそのままとした。『華嚴五教章』の引用に関しても同様である。 4) 吉津宜英 [1991 : pp.654-655]。 5) 恵谷隆戒 [1937 : pp.209-210]。 6) 法蔵の種姓解釈に関しては、鎌田茂雄 [1979 : pp.339-344], および大竹晋 [2007 : pp.78-91] を参照。 7) 恵谷隆戒 [1937 : pp.191-195]。

## 〈参考文献〉

- 恵谷隆戒 [1937] 「新出の唐法説撰梵網経疏巻上之上に就いて」, 『日華佛教研究會年報』第二年, pp.183-221.  
 坂本幸男 [1956] 『華嚴教學の研究』, 平樂寺書店, 京都。  
 鎌田茂雄 [1965] 『中国華嚴思想史の研究』, 東京大学出版会, 東京。  
 鎌田茂雄 [1979] 『佛典講座 28 華嚴五教章』, 大蔵出版, 東京。  
 吉津宜英 [1991] 『華嚴一乗思想の研究』, 大東出版社, 東京。  
 木村清孝 [1992] 『中国華嚴思想史』, 平樂寺書店, 京都。  
 大竹晋 [2007] 『唯識説を中心とした初期華嚴教學の研究—智儼・義湘から法蔵へ—』, 大蔵出版, 東京。

〈キーワード〉 法説, 『梵網経疏』, 法蔵

(東京大学大学院, 日本学術振興会特別研究員 (DC1))